

本といっしょに
旅したい。



FREE
ご自由にお取りください

新潮 クレスト・ブックス 2014-2015

〔新刊インタビュー〕 ジュンパ・ラヒリ

〔追悼〕 アリステア・マクラウド

ただいま翻訳中! これから出るクレスト・ブックス

新潮クレスト・ブックス カタログ 1998-2014

SINCE 1998

C	R	E	S
B	O	O	K
S			T

Shinchosha

未知の領域に 踏み込んで

『停電の夜に』での鮮烈なデビューから15年。
デビュー前から構想のあった長篇小説『低地』が昨年刊行された。
インド、カルカッタ郊外に育った仲睦まじい兄弟。
二十代半ばで、二人は生死を分けることになる——。
現在イタリアに暮らすラヒリが、新作と新しい言語について語る。

ジュンパ・ラヒリ

interview with Jhumpa Lahiri

聞き手

クレシダ・ライシヨン

interview by Cressida Leyshon

翻訳協力・小川高義

translated by Ogawa Takayoshi

故郷を書く

ジュンパ・ラヒリの新作長篇『低地』は、インドのカルカッタで育った二人の兄弟、スパシユとウダヤンの親密な子供時代の描写から始まる。片時も離れなかった二人が、二十代の若者となり、人生の道を画然と分かるところになる。もともと度胸のいい弟のウダヤンは、過激な革命運動ナクサライトに身を投じ、学究肌の兄スパシユは、渡米してロードアイランドの大学院で研究生生活に入る。弟は暴力闘争の果て、両親と身重の妻の眼前で殺される。兄は若い寡婦となった妻をアメリカに連れ出す。弟ウダヤンの死によって、遺された者たち——兄スパシユ、妻ガウリ、父亡きあと誕生した娘ベラ、そして兄弟の両親——の人生はどのように変わり、続いてゆくのか。

——『低地』はコルカタとニューイングランドを行き来して語られます。ニューイングランドの中でもロードアイランドと言えば、「自身も育った土地ですね。」

以前から、いわば偽装したような形ではロードアイランドのことを書いてきました。明らかにマサチューセツとわかるように設定した作品とか。もちろんマサチューセツにも住んだことがあります。今度のように



ロードアイランドと特定できる作品はなかったはず。どうしてなのかよくわかりませんが、育った場所そのままで書きにくかったのかもしれない。

たとえば『その名にちなんで』はボストン郊外という設定で、『停電の夜に』という最初の本では、頭の中でロードアイランドを思い描きながら、そうとは明かしてはいない短編もあります。こうなると場所の設定なんて、コネティカットでも、マサチューセッツでも、ロードアイランドでもいいということになってしまいますね。でも今度の長編では、はっきりとロードアイランドについて書きたかった。これは初めてのことです。

何年前か、『ステート・バイ・ステート』という本に一文を寄せました。これはジョン・ウィルシー、マット・ウェイランドの共編で、各州ごとに一人の作家が、その州と自身との関わりを書いたものです。ちょうど『低地』の執筆にかかろうとしていた時期で、このエッセーを書くことによって、自分がロードアイランドで育ったという人生の事実初めて真正面から向き合っている——じつはいまでも完全に馴染めたのかどうかわからない土地ですが——これなら大丈夫、今度の本はロードアイランドを書こう、と思ったのです。それでやっと解放されたというか、ロードアイ

ランドについて、じっくり考える、書く、思い出す、ということができました。

——実際の風景、とくに海岸線がスバシユにとつては大事ですね。スバシユの視点を意識しながらロードアイランドを見直す、考え直す、というようにすることはありましたか。

ええ、スバシユが研究生活を送る設定にしたキャンパスまで彼になったつもりで車を走らせたり、小さな浜辺を歩いたり、彼が見る

コルカタで現地の人に詳しく

話を聞くうちに、かちりと

鍵が開いたような気がしました。

それまでとつていたメモと、

符合したというか。

であるものを見ようとしました。何度もロードアイランドへ足を運んで、彼が毎日という暮らしをしたのか考えたことも、人物像を固めていくうえでは大事でした。その海岸の近くに小さな教会があるんですが、ああ、これはいい、これを彼が見ることにしよう、なんて思っています。

現代史を書く

——ウダヤンは、一九六〇年代のカルカッタで、ナクサライト（インドの過激な革命運動）と深い関わりを持ちます。そういう時代背景を描くのに、文献を調べたり、当時を知る人に話を聞いたりなさったと思いますが、まず書いて、あとから細部を詰めたのか、それともあらかじめ歴史をのみこんでしまおうと考えたのか。

のみこんで、しっかり消化してから書くつもりでした。ところがうまくいかなくて、だいぶ長いこと苛々していました。借り出した本が二冊あって——父が勤めている図書館から借りたのですが、結局、七年も借りたままになってしまっていて。ときどき読み返しては、メモをとって、しまい込んで、また読み直してメモをとってという繰り返しでした。何年こんなことを続けるんだらうと不安でした。

四分の三くらいまで書き進んでいたころ、コルカタへ行きました。それまでにも、当時のインドを知っている両親の知り合いに、「どんな時代でしたか、何があったんですか」というようなことを聞くとしていたのですが、コルカタで現地の人に詳しく話を聞くうちに、かちりと鍵が開いたような気がしました。それまでとつていたメモと符合したとい

うか。

そしてやがて、あるときとつぜん、もう調査や資料といったものを松葉杖にしなくても書けると思えたのです。その段階になると、登場人物のイメージがはつきりして、行動の動機もだいたい固まっていましたから、こういう感じの人がこういう世界に暮らしている、このまま掘り下げていけばいい、と吹っ切れました。第一段階は調べることはかりで先が見えませんでした。そのうちに調べた歴史が少しずつ見えてきて、しつかり見えてくるほどに、もう見なくてもよくなった、ということですね。

三角関係を書く

——『低地』は、いままでの作品とは文体が変わったと感じるところもあります。短く切り詰めたようなセンテンスがあって、断片的な構文を多用しているとも思えますが、それだけに緊迫感のある語り口ですね。

少し変えてみようとは思っていません。ストーリー、題材、状況、時代背景、どれもこれも重たいので、文章まで重くするのがいやで、言うべきことはできるだけ簡素にというつもりでした。いくら軽みがあってもいいのかなと。ですから、いつもよりもっと削っ

たかもしれません。草稿の段階ではもっと重かったんです。情報量が多すぎて、歴史にこだわりすぎていて、思い入れたっぷりで——これは軽くしてやらなければと思いました。



——アメリカ議会図書館の分類によると、『低地』は「兄弟」「ナクサライト運動」とならんで「三角形（人間関係として）」という下位区分にも該当することになっています。三角関係と言うなら、

もちろん、兄のスパシユと、弟のウダヤン——ウダヤン本人よりはその記憶——それから寡婦となるガウリ、という三人ですね。そういう関係はほかにも、スパシユ、ガウリ、娘のベラ、といった形で見られます。三角関係というのは、作家にとって何か意味があるのでしょうか。

ずいぶん前になりますが、ポストン大学で創作を学んでいたとき、物語をつくるうえで便利だと教わったんです。三角は坐りがいいけれども、四角のような安定はない。だからドラマを作りやすい。私は三角の連続を意識して書いているので、作品のいたるところに出ています。いろいろな書き方がありますが、私は小説というのはとりわけ、家族とは何かを考えるものではないかと思っています。何人でも家族になりえますが、少なくとも三人はいないと二世代におよぶ家族は書けません。

半開きのドア

——本誌（ニューヨーク）の夏の小説特集号で、『低地』の一部を先行して掲載しました。掲載したのは、ウダヤンの子を宿したガウリに、兄のスパシユが、一緒にロードアイランドへ行かないかと誘うところまでです。その後のアメリカでは、どういった展開もありえた。二人がそれなりに幸福

に暮らすという展開も一つの可能性ですが、複雑な現実にはぶつかっていくことは初めから想定されていたのですか。

ええ、そうです。緊急避難のように工作した解決法が、ある意味では間違っていたけれど、それでいて間違いでなかったともわかる、ということを考えていました。必要だと思えたことが、必ずしも解決にならなかった。人生そんなものではないでしょうか。何かをするとして、それがベストではないけれど、そのときは仕方ないというような。そういう方向性でしたから、二人のハッピーエンドはまったく考えていなかった。ものすごく複雑な、困った展開になるのだということ以外は、何もありませんでしたけれど。

——ロードアイランドへ行ってからの結婚生活については、あらかじめ計算なさっていたのですか。
お腹の子が生まれることは予定どおりでしたが、夫婦がどうなるかまではあまり決めていませんでしたね。ガウリとスパシユは子供に対する情緒という点でくつきり分かれませんが、そのあたりを考えあぐねて時間がかかってしまいました。誰が何をどう思うかというようなことで。ガウリが子供によく愛着を感じるといふ可能性もあったと思います。いままなお愛する亡夫の子ということ、子どもが生きがいになって、スパシユが脇に迫いや

られるとか。そういう成り行きもあったかもしれない。でも実際に子どもが生まれてからの二人を追いかけて書いていたら、やはり違う方向へ進んでいました。

——ウダヤンの死をもっとも重く受けとめるのがガウリですね。かけがえのない人を失って、子どもが生まれても、代わりににはならない。仕事を持つようになる程度は埋め合わせられますが、いささか不毛なやり方でしょう。ガウリはもつ

必要だと思えたことが、

必ずしも解決にならなかった。

人生そんなものではないでしょうか。

それがベストではないけれど、

そのときは仕方ないというような。

とも悲劇的な軌跡をたどりますが、それでいて最後には彼女にもちらりと希望の光が差している。

もっとエンディングを暗くしたらどうかとも思ったのですが、でも、やっぱり違うかなと。これは作家の都合みたいなものですね。娘のペラを書いていると、その人物像に私の気持ちが入っていった、もっと彼女のことを考えてあげたくなったんです。実の父親

が革命の過激派で、殺されたことも知らずに、秘密やら嘘やらに生かされて、この上さらに母親が自殺するとか、一生ついてまわる重みを背負わせて終わったら、いくら何でもひどすぎやしないか。ここはペラを守ってやりたいたいと思いました。それにガウリ自身だって充分ひどい目に遭ってますからね。ちゃんと解決してやらないまでも、ひょっとしたらどうにかなりそうな、半開きのドアみたいに終わることになりました。

イタリア語で書く

——二〇一二年からローマを拠点にして、イタリアの文学文化にとっぷり浸っておられますね。お書きになるものにイタリア語が染み込むというようなことはありませんか。

ええ、おっしゃる通りで、染み込んでます。つまり今年は何か書くとしたらイタリア語になっていて、これまでとは別の言語で書くという突拍子もない実験をしている最中です。どうしてこんなことをしているのか自分でもわからなくて、いったい何のつもりなのでしょうかね。どういう結果になるのか全然わかりません。ともかく一年前にローマに着いて、ほんの数日のうちに、とうの昔から英語で書いていた日記が、イタリア語に切り替



photograph by Aoi Noboru

わったのです。イタリア語自体は、もう何年も勉強していました。その場に見えるものや家族がしていることを書いて、イタリア語の身辺雑記みたいなものを残しています。いまも勉強中なので間違えてばかりですよ。会話くらいなら問題ないのですが、書くことによって、あらためて勉強になっている気がします。

ふつう言葉というのは、本当に身につけてから最後に書けるようになるものだと思うれています。最後のフロンティアですよ。ところが私の場合は、話しているよりも書いているときのほうがイタリア語に自信が持てると思うことがあるんです。書いていながら、小休止して考えて書き直すこともでき

る。でも話していると、あ、いけない、と頭の中で考える。いま時制を間違えた、へんな単語を使った、など。でも、言ってしまったらもうどうしようもない。

いまのところは、何というか、とんでもない実験みたいな段階にいるのですが、そこに解放感もあって、不完全に書くということの自由を満喫しています。子供の頃を思い出し、初めてストーリーが書けるようになって、文章らしきものを紙に書くのが楽しくてどきどきしていたころ。

別の言語で書くというのは、右手を背中にまわして縛って、左手で字を書いているような感じがします。もどかしいというか。ただ、その品不足の感じがいいんです。イタリ

Jhumpa Lahiri

1967年、ロンドン生まれ。両親ともインド・カルカッタ出身のベンガル人。二歳で渡米。東海岸ロードアイランドで成長する。大学、大学院を経て、99年「病気の通訳」でO・ヘンリー賞受賞。同作収録の『停電の夜に』でPEN/ヘミングウェイ賞、ニューヨーカー新人賞、ビュリツァー賞ほか受賞。2003年、長篇小説『その名にちなんで』発表。08年刊行の第二短編集『見知らぬ場所』でフランク・オコナー国際短篇賞を受賞。

ア語で何か書こうとすると、いかにも資源が乏しくて、道具箱が小さい。そこそこの語彙しかありませんね。文法はわかっているけれど、仕上がりは単純なものにしかならない。英語だったら、たとえば上空がどう見えるかを書こうとするなら、二十五種類くらい言葉を思いついて選ぶこともできる。イタリア語だと二つか三つしか思いつかない。だから、素直に書いているとも言えますね。たとえ不完全でも、なんだか純粹になる。

未知の領域

——イタリア語でストーリーも書くのですか？

はい、一つだけ、出だしと真ん中と最後があってストーリーと言えそうなものを書きました。あとは四ページか五ページくらいの長さの、ある人物や瞬間をスケッチしたようなものを、いくつも書いてます。

——イタリア語で人物を造型しようとするのとどこかに違いは出ますか。

いまお話しした一つのストーリーをイタリアの友人に見てもらったら、私の英語の作品を読んでいる人たちが口をそろえて、いままでとは違う作家になったようだと仰うんです。もちろん間違はなく自分で書いたのに、英語なら書かなかったらと思うような風変

わりな話なんです。

ほら、こんな夢がありませんか。突然、キツチンの奥に別の部屋が見つかる。それまでの人生になかった二メートル四方の空間が出現しているというような。でも夢じゃないんです。いま私はその部屋にいる。現実そうなんです。いま私はその部屋にいる。現実そうなんです。いま私はその部屋にいる。現実そうなんです。いま私はその部屋にいる。現実そうなんです。

それで言葉というものを考えることにもなりました。二つ以上の言語で書いてみると、

一つの言語がどれだけ固有の複雑な存在なのかわかります。まったく違う独立した別個のものです。響きが違う。感触が違う。エッセンスが違いますね。もちろん、あることを翻訳して同じように言うことができます。ところが、そうでであっても、言語はそれぞれに特徴があつて働いています。そんなことをいま考えていて、言葉なるもの、言葉のありよう、言葉が果たすことに、ある種の畏怖を覚えているのですが、別言語で書くという実験のおかげで、それが大きく浮かび上がってきたのだと思っています。

——コルカタやロードアイランドで行なったような取材旅行をして、イタリア語でメモをとるというにはあり得ますか。

コルカタへ行ってイタリア語を書くだろうかという話ですね？ それはないだろうと思います。おかしなもので、このところアメリカに一月ほど戻っていますけれど、ローマで書き込んでいたノートが一杯になったので、アメリカへ発つ前に急いで買いに行つて、さあ、もう大丈夫、これにまた毎日少しずつでも書こう、なんて思っていたのに、全然書いていないんです。ローマへ帰ったら元に返

どうしてこういうことになったのか、

どうして自然にイタリア語を

書きだしていったのかというと、

もう一年以上も英語の文章を

読んでいないからでしょう。

るのでしょうが、いまはアクセスできないという感覚。それでフラストレーションがたまつて、ひどくもやもやしています。イタリア語に恋をして、どっぷり浸つて、みずから志願して言語的エグザイルの状態になつていくというのに、そっちへ近づいていけないんです。

どうしてこうなったのか、どう

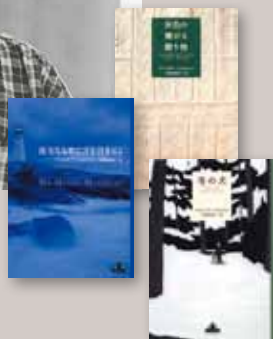
して自然にイタリア語を書きだしていたのかというところ、もう一年以上も英語の文章を読んではないからという理由もあるでしょう。私にとつては、いつでも書くことは読むことへの本能的な反応というに近いものでしたから、こういう結果になつても無理はありません。なにしろイタリア語を読んで、読んで、読んで、読んで、読むことが脳の中に組み込まれて、そればかり考えて、いくつもの文を読みながら、この新しい言語、新しい語彙リズム、ものの言い方を吸い込もうと没頭しているのですから。

ちょっと前の『ニューヨーク・タイムズ』に文とはどんなものかという文章を寄稿したのですが、その中で子供の頃の読書のことを書きました。子供ながらに、読んだものをどうにか真似して書きたくつてしまったのです。いまの私にも同じことが生じているような気がして、すごくおもしろいと思っています。わくわくする不思議な気分で、なんだか未知の領域に來ているような感もある。そういうものとして楽しんでいます。



memorial

photograph courtesy of
web2.uwindsor.ca



「石の彫刻家」のような人 追悼アリスティア・マクラウド

『灰色の輝ける贈り物』
『冬の犬』
『彼方なる歌に耳を澄ませよ』
すべて中野惠津子訳

カナダ東端の厳寒の島を舞台に、過酷な自然とともに生きる人々を描きつづけた作家、アリスティア・マクラウドが、4月20日、77歳で亡くなりました。生涯に著した本は、短篇集『灰色の輝ける贈り物』『冬の犬』、長篇小説『彼方なる歌に耳を澄ませよ』の3冊だけ。きわめて寡作でありながら、読者に深く愛され、その死に際しては、マイケル・オンダーチュ、マーガレット・アトウッドなどカナダの作家だけでなく、各国の作家たちが追悼の意を表しました。アメリカの短篇の名手ジョイス・キャロル・オーツは、夫とともに文芸誌「オンタリオ・レビュー」を創刊した理由の一つが、マクラウドの短篇を掲載するためだったと語っています。

担当編集者ダグラス・ギブソンは、マクラウドのことを「石の彫刻家」と呼んでいました。言葉が現れ出るまで大変な時間がかかるけれど、巧みに彫り上げられていて、いつまでも消えな

いように思えるからだそうです。

クレスト・ブックスでの刊行を薦めてくださった池澤夏樹さんをはじめ、マクラウドは日本の作家からも敬愛されていました。小川洋子さんが『冬の犬』に寄せてくださったつぎの文章を読むと、繊細で気骨のある作品世界がありありと伝わってきます。

「馬のひづめから舞い上がる、白い星のような雪の美しさ。遠い過去から受け継がれる死の記憶を、心静かに胸の洞窟におさめる人間たちの哀しさ。本書は、この世に生きるものは皆、人間も動物も、与えられたそれぞれの生をただ生きてゆくしかない、という雄大な受容の物語を描き出している」

マクラウドは『冬の犬』収録の短篇「すべてのものに季節がある」でこう書いていました。

——誰でもみんな、去ってゆく。でも、嘆くことはない。よいことを残してゆくのだから。

ただいま翻訳中!

この秋以降、刊行を予定している作品のなかから、
ヨーロッパ3作、北米1作、イスラエル1作の
著者と作品をめぐって、
それぞれの翻訳者の方々にご紹介いただきました。



photograph by Tsunota Mitsunaki

*タイトルはすべて仮題です。

『映画を生きる』

エリック・フォトリノ
Baisers de Cinéma by Éric Fottorino

吉田洋之

text by Yoshida Hiroyuki

舞台はパリ。弁護士
ジルは二人の女性を追
い求める。決して手に
届きそうにない二人。
まだ見ぬ女優だった母
と人妻マイリス。二人
とも後ろ姿が捉えられそうになると、
するりと手のひらから逃れてしまう。
二人は《光》に喩えられる。ジルは光
を求めて、映画の撮影技師だった亡き
父との対話を深めていく。光は正確
じゃなきゃいけない、と父は言う。ジ
ルはパリの街を、映画という深い森の
中を、憑かれたようにさまよひ歩く。
「恋なんてものではなく、それはもうひ
どいものだった。彼女は死と隣り合わ
せの愛の欲望を強烈にかき立てるの
だ」。マイリスとはいったい何者か。母
は誰なのか。ジャンヌ・モロー、アヌー
ク・エーメ、それとも……。ル・モン
ド紙の元編集長エリック・フォトリノ
が描くスーヴェルヴァーグへのオマージュ。
二〇〇七年フェミナ賞受賞作。

(二〇一四年十月刊行予定)



『善女の愛』

アリス・マンロー
The Love of a Good Woman by Alice Munro

小竹由美子

text by Kotake Yumiko

冒頭の一編は、川へ
泳ぎに行った三人の男
の子が、町の検眼士が
車ごと沈んでいるのを
発見する不穏な場面で
始まる。ついで奉仕が
生きがいの訪問看護師が登場。件の検
眼士について恐ろしい話を聞かされた
彼女は、自らの信念に従ってある賭け
を思いつく。一見穏やかなラストシー
ンの奥には禍々しい闇が広がり、マン
ローの妻みを思い知らされる作品だ。
同じく犯罪の影が漂う「コルテス島」
では、作者自身の新婚生活が背景と
なっているのも興味深い。一九九八年
に全米批評家協会賞を受賞した、マン
ロー九冊目の作品集となる本書は、手
紙のみで綴られるなど様々な工夫の凝
らされた、この作者ならではの巧妙な
語り口で、愛や裏切りや老いの孤独の
物語を展開する。八篇の掉尾を飾るの
は、赤ん坊の語りによって女が母とな
る転換点を描く、鮮烈な印象を残す一
篇だ。

(二〇一四年十二月刊行予定)



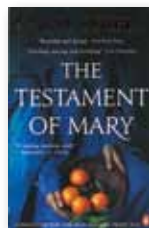
『マリアが語り遺したこと』

コルム・トビーン

The Testament of Mary by Colm Tóibín

榎木伸明

text by Tochigi Nobuaki



老いて死を前にした聖母マリアが過ぎ去った時を語る中編小説である。最初、ひとり芝居として上演され、トニー賞三部門の

候補になった。伝説によれば、キリストが十字架につけられた後、マリアは静かに余生を送ったという。絵画や物語に描かれた彼女はどれも穏やかな顔をしていて、怒りや悔恨が渦巻いていたのではないだろうか？ 老いたマリアは、キリストが弟子たちと行動しはじめた頃を回顧し、カナの婚宴や蘇生したラザロを見た印象を語り、丘の上で見た受難の一部始終をことばにしていく。息子の人生を脇から見続けた母親が語る、遺言代わりの物語にほくたちは固唾をのむ。トビーンのマリアは柔和を演じることなく、苛烈な人間性をむき出しにして生きてきたのだ。

(二〇一四年十一月刊行予定)

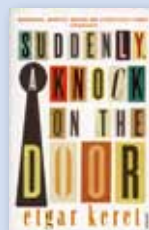
『突然、ノックの音が』

エトガル・ケレット

פתאום דפיקה בדלת by אתגר קרת

母袋夏生

text by Motai Natsu



ノックの音にドアを開けると、見知らぬ人がいたり事件が起こる。表題作では創作に行き詰まった作家が鏡を突きつけられて物語を要求され、「金魚」

では民話さながらに、三つの願いは？と聞かれる。それぞれ、思いも寄らない結末が待っている。もちろん、ドアの出てこない話も多いし、梯子をはずされることもある。

地中海沿岸のテルアビブに住むエトガル（ヘブライ語で挑戦の意味・ケレットの奇想と独創に富んだこの三十八の超短編には、さりげない暮らしの中の心理の裏側が巧みに描きだされている。冒険や叙情やセックスのおまけもある。それに、どれも短い。あつという間に不思議の世界に飛びこめて、ハハツとかフツツと笑え、少し考えさせられる。鋭い人間観察に貫かれながら、文章は平易でリズムミカルなので、読みやすい。ぜひ覗いてください。

(二〇一五年刊行予定)

『ヴォルテール、ただいま参上!』

ハンス=ヨアヒム・シェートルリッヒ

Sire, ich eile by Hans Joachim Schädlich

松永美穂

text by Matsunaga Miho



ベルリンの書店で新刊本を漁っていたら、シェートルリッヒの新しい小説が出ていたので早速買った。一九三五年生まれで、ラディカルな

ポストモダン小説を書いたり、リアルでシニカルな老人小説を書いたり、意表を突く作品で読者を驚かすのがうまい作家だ。「健在なんだ、よかった……」そんな感慨とともに新作を開いてみたら、これがおもしろいのなんの。歴史小説なのに、爆笑の嵐に襲われた。フリードリッヒ大王とヴォルテールという、実在の人物が主人公。プロイセンのフリードリッヒは、皇太子時代からフランスの思想家ヴォルテールの大ファンで、せっせとファンレターを送っていた。熱烈なラブコールに応えて宮廷に赴くヴォルテール。ひと癖もふた癖もあるこの二人のドラマチックな出会いと愛憎、衝突の物語。資料を駆使したスタイリッシュな語りは名人芸!

(二〇一五年刊行予定)



停電の夜に
ジュンパ・ラヒリ
小川高義訳

ろうそくの灯りの下、秘密の話を一。ピュリッツアー賞ほか独占! インド系女性作家による驚異のデビュー短編集。もはや古典的名作。

2000円
590019-9



朗読者
ベルンハルト・シュリンク
松永美穂訳

十五歳の少年ミハエルの経験した切ない初恋。母親のような年の女性ハンナを失踪させた秘密とは……。衝撃の世界的ベストセラー。

1800円
590018-2



巡礼者たち
エリザベス・ギルバート
岩本正恵訳

表舞台とは無縁の人々に突然訪れる「人生の一瞬」。アメリカの批評家、作家、読者を夢中にさせた、恐るべき新人のデビュー短編集。

2000円
590007-6



**パリ左岸の
ピアノ工房**
T・E・カーハート
村松潔訳

パリの小さな工房で、若き職人が魔法のように再生する名器の数々……。眠っていた音楽とピアノへの愛が甦る傑作ノンフィクション。

2000円
590027-4

Shincho Crest Books
Catalog
1998-2014

北はスウェーデンから南はジンバブエまで。
新潮 Crest ･ ブックスがお届けする世界各地の文学
65タイトルをご紹介します。(価格は税別です)



ウォーターランド
グレアム・スウィフト
真野泰訳

土を踏みしめていたはずの足元に、ひたひたと寄せる水の記憶……。ブッカー賞作家によるもっとも危険なもっとも愛すべき最高傑作。

2600円
590029-8



シェル・コレクター
アンソニー・ドーア
岩本正恵訳

孤島で貝を拾い、静かに暮らす盲目の老貝類学者を襲った奇妙な騒動を描く表題作ほか、O・ヘンリー賞受賞作を含む鮮やかな全八篇。

1800円
590035-9



ソーネチカ
リュドミラ・ウリツカヤ
沼野恭子訳

本の虫で、容貌のぼっとしないソーネチカ。最愛の夫の秘密を知ったとき彼女は……。神の恩寵に包まれた女性の静謐な一生の物語。

1600円
590033-5



**灰色の輝ける
贈り物**
アリスティア・マクラウド
中野恵津子訳

カナダ、ケープ・ブレトン島の苛酷な自然の中で、漁師、坑夫を生業とし、一族としての思いを胸に生きる人々。奇跡のような名短編集。

1900円
590032-8



ペンギンの憂鬱
アンドレイ・クルコフ
沼野恭子訳

憂鬱症のペンギンと暮らす小説家ヴィクトル。新聞の死亡記事を書く仕事をつきかたけに、身边に不可解な出来事が次々に起こって……。

2000円
590041-0



その名にちなんで
ジュンパ・ラヒリ
小川高義訳

長く口になぜきた思い。愛しい人を遠く焦がれる切なさ。名手ラヒリが精緻に描く人生の機微。ふかふかと胸にしみる待望の初長篇。

2200円
590040-3



冬の犬
アリスティア・マクラウド
中野恵津子訳

カナダ東端の島で、犬、馬、驚ら動物とともに、祖先の声に耳を澄ませながら人生の時を刻む人々。生の厳しさと美しさを基えた八篇。

1900円
590037-3



2200 円
590045-8

**彼方なる歌に
耳を澄ませよ**
アリスティア・マクラウド
中野恵津子訳

18 世紀末、スコットラ
ンドからカナダ東端の
島に渡った赤毛の男が
いた——。カナダの「静
かな巨人」が描く、愛
すべき一族の物語。



1800 円
590044-1

遺失物管理所
ジークフリート・レンツ
松永美穂訳

婚約指輪に旅芸人のナ
イフ、そして腹に現金
が縫い込まれた人形。
遺失物管理所では、今
日もさまざまな人間ド
ラマが幕を開ける。



2200 円
590043-4

**奇跡も語る者が
いなければ**
ジョン・マグリガー
真野泰訳

奇跡は起こった。密や
かに。誰にも知られな
いまま。斬新な文体と
恐るべき完成度で無名
の人々の生と死を結晶
させた現代の聖物語。



1900 円
590052-6

**世界の果ての
ビートルズ**
ミカエル・ニエミ
岩本正恵訳

笑えるほど最果ての村
にある男女の情愛……。凍
てつく川。薄明かりの森。
そして手づくりの僕のギ
ター！ スウェーデンの
傑作長篇小説。



1600 円
590051-9

ある秘密
フィリップ・
グランベール
野崎崎訳

孤独な少年の夢想在残
酷な過去を掘り起こす。
禁断の恋。懊悩。そし
てホロコースト。一九
五〇年代のバリを舞台
にした自伝的長篇。



2400 円
590049-6

素数の音楽
マーカス・デュ・ソートイ
富永星訳

神秘的な謎に満ちた数、
素数。その不思議な美
と今も続く天才たちの
挑戦とは。小川洋子さ
ん絶賛のスリリングなノ
ンフィクション！



1900 円
590060-1

千年の祈り
イーユン・リー
篠森ゆりこ訳

長い祈りに支えられた父
娘の縁。人生の黄昏に
ある男女の情愛……。オ
コナー賞、ヘミングウェ
イ賞はか緋なめ驚異の
デビュー短篇集。



2400 円
590058-8

林檎の木の下で
アリス・マンロー
小竹由美子訳

スコットランドの寒村か
ら新大陸カナダへ——。
三世紀の時を貫く作家
自身一族の物語。落
ちついた声、天才的な筆
捌き。12 の自伝的短篇。



2400 円
590053-3

イラクサ
アリス・マンロー
小竹由美子訳

一瞬が永遠に変わるさ
ま。長い年月を見通す
まなざし。長篇小説を
凝縮したかのような味
わいの、「短篇の女王」
による九つの物語。



1600 円
590064-9

ペット・サウンズ
ジム・フジリー
村上春樹訳

恋愛への憧れ、父との
確執、麻薬、肥満……。
ビーチ・ボーイズの最
高傑作『ペット・サウ
ンズ』は、壮絶な戦い
の記録でもあった。



2200 円
590063-2

土曜日
イアン・マキューアン
小山太一訳

ロンドン、午前四時。
未明の空に火を噴く飛
行機。テロか？ それ
とも？ 名匠の優美極
まる筆致で描かれる、
脳外科医の不穏な一日。



1900 円
590061-8

海に帰る日
ジョン・バンヴィル
村松潔訳

海に消えた少女の記憶
が、今もわたしを翻弄
する。荒々しく美しい、
あの海のように。アイル
ランド随一の文章家の
ブッカー賞受賞作。



2300 円
590068-7

見知らぬ場所
ジュンパ・ラヒリ
小川高義訳

父と母の、子供たちの、
恋人たちの歳月。『停電
の夜に』以来九年ぶり、
世界待望の最新短篇集。
フランク・オコナー国際
短篇賞受賞！



1900 円
590066-3

**バーデン・
バーデンの夏**
レオニード・ツイギン
沼野恭子訳

賭博熱、情欲、嫉妬
……ドストエフスキー
夫妻の身を焦がすような
新婚旅行。その愛の日々
を追体験する汽車旅の
行き着く先は——。



1900 円
590065-6

密会
ウィリアム・トレヴァー
中野恵津子訳

早朝のオフィス、カフェ
の片隅の定席、離婚した
彼女の部屋。秘めた二
人の愛の決断とは。「英
語圏最高の短篇作家」
による十二篇。



郷郷者

ベルンハルト・シュリック
松永美穂訳

郷郷した兵士が見たものは、なつかしい妻と、その後ろにいる見知らぬ男だった。『朗読者』の著者が積年の思いを注ぎ込んだ傑作長篇。

2200円
590072-4



時のかさなり

ナンシー・ヒューストン
横川晶子訳

ナチス統制下のドイツから現代のアメリカまで。四代にわたる子どもたちが語る、ある一族の秘められた真実。フェミナ賞受賞作!

2300円
590071-7



記憶に残っていること

アリス・マンロー他
堀江敏幸編

世界最高の短篇小説をこの一冊に。マンロー、トレヴァー、ラヒリ、マクラウド、イユン・リー……創刊から10年間の全短篇集から厳選。

1900円
590070-0



初夜

イアン・マキューアン
村松潔訳

ずっと二人で歩いていけたかもしれない。あの夜の出来事さえなければ。遠い日の愛の記憶を克明かつ繊細に描く、異色の恋愛小説。

1700円
590079-3



通訳ダニエル・シュタイン

上下
リュドミラ・ウリツカヤ
前田和泉訳

ゲシュタポでナチスの通訳をしながらユダヤ人脱走計画を成功させた男。後にカトリック神父となりイスラエルに渡るその激動の生涯。

上 2000円
下 2200円
590077-9,78-6



最終目的地

ピーター・キャメロン
岩本正恵訳

ウルグアイの邸宅で繰り広げられる愛の物語。英国古典小説の味わいをもつ滑稽でエレガントな傑作長篇。アイヴォリー監督により映画化。

2400円
590075-5



夜と灯りと

クレメンス・マイヤー
村松潔訳

人々の心を覆う深い闇と、そこに灯るささやかな光。旧東ドイツ出身の新鋭による初短篇集。ライブツィヒ・ブックフェア文学賞受賞。

1900円
590082-3



シンメトリーの地図帳

マーカス・デュ・ソートイ
富永星訳

数学史上の知られざる偉業「シンメトリーの地図帳」完成とは。天才たちの息遣いとともに描かれる、美しき数学ノンフィクション。

2500円
590081-6



ポート

ナム・リー
小川高義訳

生後三ヶ月でベトナム難民としてオーストラリアへ。ブッシュカード賞、ディラン・トマス賞ほか多数受賞の清新なデビュー短篇集。

2300円
590080-9



いちばんここに似合う人

ミランダ・ジュライ
岸本佐知子訳

孤独な魂たちが束の間放つ火花を、切なく鮮やかに写し取った十六の物語。映画監督としても活躍する著者のオコナー賞受賞作。

1900円
590085-4



奪い尽くされ、焼き尽くされ

ウェルズ・タロー
藤井光訳

夏休みを過ごす少女から、暴虐を尽くすヴァイキングまで。多彩な声と視点で荒涼たる日常を浮き彫りにする、恐るべき初短篇集。

1900円
590084-7



サラの鍵

タチアナ・D・ロネ
高見浩訳

パリの女性記者と、ナチに連行された少女。六十年の時を越え、二つの人生が交錯する——累計三百万部のベストセラー。映画化原作。

2300円
590083-0



小説のように

アリス・マンロー
小竹由美子訳

夫を子連れの女に奪われた音楽教師。今は幸福に暮らす彼女の前に過去を思わせる小説が現れて——『短篇の女王』による十の物語。

2400円
590088-5



無限

ジョン・バンヴィル
村松潔訳

死に行く父と、見守る家族。そして彼らを眺める、いたづら好きの神。慈愛と思索とユーモアに満ちた、ブッカー賞作家の傑作長篇。

2200円
590087-8



黙禱の時間

ジークフリート・レンツ
松永美穂訳

ギムナジウムで開かれた追悼式。遺影を見つめる少年に魅える、美しい教師とのひと夏の思い出。巨匠による、海に彩られた純愛小説。

1600円
590086-1



ソーラー
 イアン・マキューアン
 村松潔訳

太陽光発電でひと儲けを企む狡猾で好色なノーベル賞科学者。だが驚かない彼の人生にも暗雲が――。現代社会を笑いのめす最新長篇。

2300 円
 590091-5



週末
 ベルンハルト・シュリンク
 松永美穂訳

テロリストが二十年ぶりに出所した週末。旧友たちの胸に甦る、恋、確執、未来への祈り。『朗読者』の著者が描くもう一つの「戦争」。

1900 円
 590090-8



オスカー・ワオの短く凄まじい人生
 ジュノ・ディアス
 都甲幸治・久保尚美訳

オタク青年オスカーの悲恋の陰には、一族が背負った呪いがあった。全米批評家協会賞・ピューリッツァー賞をダブル受賞した傑作長篇。

2400 円
 590089-2

Shincho Crest Books
Catalog
 1998-2014



ロスト・シティ・レディオ
 ダニエル・アラロンコン
 藤井光訳

ある朝ラジオ局を訪れた少年の手には、無教の行方不明者たちのリストが握られていた。ペルー系アメリカ人作家によるデビュー長篇。

2100 円
 590093-9



メモリー・ウォール
 アンソニー・ドーア
 岩本正恵訳

記憶再生装置を手に入れた認知症の老女。ダムに沈む山村の人々。戦地でツルに出会う米兵。記憶をめぐる静謐で雄大な六つの物語。

2000 円
 590092-2



女が嘘をつくとき
 リュドミラ・ウリツカヤ
 沼野恭子訳

夏の別荘で、波瀾万丈の生い立ちを語るアイリーン。ところがその話はほとんど嘘で……。嘘をつく女たちの哀しくも微笑ましい人生。

1800 円
 590095-3



残念な日々
 デイミトリ・フェルフルスト
 長山さき訳

貧しく、下品で、誇り高い。のんだくれの父一族との少年時代。心をつかんで離さない、ベルギーの俊英による自伝的連作短篇集!

1900 円
 590094-6



手紙
 ミハイル・シーシキン
 奈倉有里訳

戦争に行った若者と残された少女。ふたりは百年の時を隔ててめぐり会う。死を超えて、時空を超えて綴られた、瑞々しい愛の手紙。

2400 円
 590097-7



タイガーズ・ワイフ
 テア・オブレイヒト
 藤井光訳

「不死身の男」と「トラの嫁」。二つの物語が、祖父の人生の謎を浮き彫りにする――。本屋大賞翻訳小説部門第一位。驚異のデビュー作。

2200 円
 590096-0



夏の嘘
 ベルンハルト・シュリンク
 松永美穂訳

避暑地で出会った男女。癌を患う大学教授。作家とその夫。小さな嘘をきっかけに秘められた思いが溢れ出す。著者十年ぶりの短篇集。

2000 円
 590100-4



終わりの感覚
 ジュリアン・バーンズ
 土屋政雄訳

精緻、深遠、洗練。四度目の候補にしてブッカー賞受賞。英国を代表する作家の、時間と記憶をめぐる優美でサスペンスフルな中篇。

1700 円
 590099-1



祖母の手帖
 ミレーナ・アグス
 中嶋浩郎訳

サルデーニャの祖母が愛した「帰還兵」。イタリアの新鋭による、ひたむきで官能的な愛の物語。美しい器楽曲を思わせる小さな本。

1600 円
 590098-4



こうしてお前は彼女にフラれる

ジュノ・ディアス
都甲幸治・久保尚美訳
どうしていつも、うまくいかないのか？ 浮気男ユニオールとたくさんの女たちが繰り広げる、おもしろくも切ない九つめの愛の物語。

1900円
590103-5



イースタリーのエレジー

ペティナ・ガッパ
小川高義訳
繊細な情感。とぼけた味わい。さまざまな階層のジンバブエの人々の日常をモザイクさながらに描きだした類まれなデビュー短編集。

1900円
590102-8



アンネ・フランクについて語るときに僕たちの語ること
ネイサン・イングランダー
小竹由美子訳

コミカルな語りに近い倫理性。人間の普遍を描き出す啓示のような物語。フランク・オコナー国際短篇賞受賞作。

1900円
590101-1



いにしへの光

ジョン・バンヴィル
村松潔訳
姿を消した人気女優と後を追う老俳優の、奇妙な逃避行。いくつかの曖昧な記憶が不意に新しい像を結ぶ。ブックアワード作家の最新作。

2100円
590105-9



美しい子ども

ジュンバ・ラヒリ他
松家仁之編
シリーズ創刊15周年を記念して、全101篇から選んだ傑作短篇アンソロジー。ラヒリ、ミランダ・ジュライ、マンロー、シュリンクほか。

1900円
590104-2



もう一度

トム・マッカーシー
榎木玲子訳
謎の事故で記憶を失い、巨額の示談金を得た男。失われた自分は、莫大な金で取り戻せるのか？ 絶賛と論争を呼んだ痛快な異色作。

2100円
590107-3



ディア・ライフ

アリス・マンロー
小竹由美子訳
2013年ノーベル文学賞を受賞した短篇小説家が、透徹した眼差しと眩いほどの名人技で描き出す凡人々々の途方もない人生の深淵。

2300円
590106-6



大いなる不満

セス・フリード
藤井光訳
なぜか毎年繰り返される、死者続出のピクニック。平均寿命一億分の四秒の微小生物。不条理と笑いに満ちた圧倒的デビュー短編集。

1800円
590109-7



遁走状態

ブライアン・エヴンソン
柴田元幸訳
前妻と前々妻に追われる元夫。勝手に喋る舌を止められない男。明晰に語られる十九の悪夢。ホラーも純文学も超える驚異の短編集。

2100円
590108-0



低地

ジュンバ・ラヒリ
小川高義訳
インド民主化運動のなかで殺された弟。その身重の妻をアメリカに連れ帰った兄。愛と失意が織り成す波乱の家族史。待望の長篇小説。

2500円
590110-3



ハイウェイとゴミ溜め

ジュノ・ディアス
江口研一訳
『オスカー・ワオの短く妻まじい人生』の著者による伝説的デビュー作。全米最優秀短篇に選出された「イスラエル」ほか全十篇。

1900円
590004-5

Shincho Crest Books
Catalog
 1998-2014

【最新刊】

【復刊】